

## 「故郷」を訪ねて

浅井 登紀子\*

2020年3月、私は調査地で出会った人々の「故郷」を訪問するため、スリランカ北部州のマンナール県に向かっていた。

私の主な調査地であるスリランカ西海岸に位置するプッタラム県には、内戦中に反政府タミル武装勢力LTTE (Liberation Tigers of Tamil Eelam) によって北部州の故郷を追放されたムスリムの人々が多く避難し、その後も暮らし続けている。彼らからは避難後の苦労や故郷への郷愁が語られる一方、すでに生活基盤を築いているプッタラムと故郷を比較して、帰還するつもりはないという声も聞かれた。私の主な関心は、プッタラムで暮らす北部州出身のムスリムの人々の生活にあったが、話を聞く中で、彼らの故郷を訪ねて帰還した人々の話も聞いてみたいと思うようになった。ここでは、そこで垣間見ることのできた人々の現在や感じたことを記述したい。

### スリランカ内戦とムスリムの追放

スリランカは多民族国家である。全人口の約75%を占めるのは多くが仏教徒でシンハラ語を話す「シンハラ」、次に多いのはタミル語を話しヒンドゥー教徒が多数を占める

「スリランカ・タミル」と、南インドから移住したプランテーション労働者の子孫とされる「インド・タミル」を合わせた「タミル」と呼ばれる人々、タミルに次ぐ第2のマイノリティが、人口の約9%を占め一般的に「ムスリム」と呼ばれる「スリランカ・ムーア」だ [Department of Census & Statistics, Ministry of Policy Planning and Economic Affairs 2015]。

スリランカでは1983年から2009年にかけて、タミル多数派地域である北部・東部州の分離独立を求めるLTTEと、多数派シンハラの支持を得たスリランカ政府軍との間で民族紛争がおこなわれた。シンハラ対タミルの構図で語られるスリランカ内戦でムスリムの被害が取り上げられることは少なく、内戦後の復興支援でもムスリムは周縁化され続けてきた。

LTTEによる北部州からのムスリム住民の追放がおこなわれたのは1990年のことである。背景には80年代のムスリム政党の設立をきっかけにLTTEの反ムスリム感情が高まったことなどがあるといわれる。当時75,000人以上いたとされる北部州のムスリ

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ム住民は、数時間から2日間の間に故郷を追放され国内避難民となった。追放による人的被害はなかったものの、着の身着のまま避難を余儀なくされた人々は避難後も困難な生活に直面した。内戦中多くの人々はLTTE支配下の北部州に帰還できず、内戦終結後も政府による帰還支援の対象とはならなかった。また、避難生活の間の故郷の環境の変化や、避難先で生活基盤をすでに築いていることから、現在も避難先の地域にとどまっている人が多いとされる。

#### 内戦中に帰還した人々

マンナール到着の翌日、県庁の車で目的地であるE集落到連れて行ってもらった。30分ほどで到着し、まずは地域の行政官であるタミル女性の案内で集落をまわった。

最初に出会ったのは、夫と2人の子どもと暮らす28歳の女性だ。彼女の両親と上の兄弟は追放後クルネーガラ県に避難し、彼女が8歳の頃に家族でE集落到帰還した。帰還後は主に母親が一家の大黒柱として、長期にわたる海外出稼ぎで家族の生活を支えた。それでも生活は苦しく、20歳の弟以外の兄弟は7～9年生で就学を中断したという。

タミル人口の多い北部州の中でマンナール県は比較的ムスリムの多い地域であったが、E集落はその中でも大きいムスリム集落で、教育レベルも高く公務員やビジネスで成功した人が多いという。E集落出身者が集住するプッタラムのN集落も、北部州の他地域出身者から同様のイメージをもたれていた。一方で、E集落には漁業や林業を生業にしてい

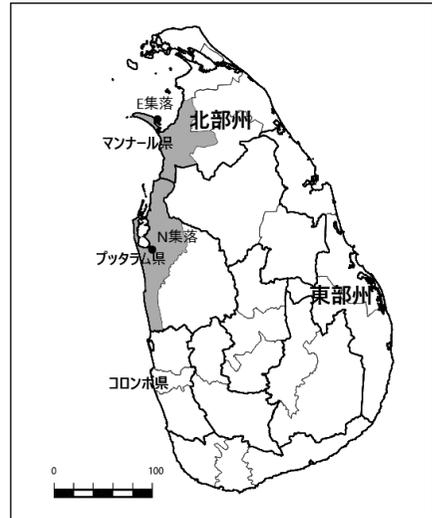


図1 スリランカ地図

た人々もおり、その中には避難先で生業を得ることが難しく、内戦中でも帰還した人もいるという話も耳にした。

彼女は「ここにいる人は貧しい人ばかり。子どもの頃から漁業をして大人になれば日雇いの仕事。あっち(N集落)の人は外国やコロンボにお店をもっているような人たち」と話していた。

次に訪問した家の人々は、私の顔を見るなりやけに親しげな笑顔を向けた。不思議に思っていると、20歳の娘が「この間N集落での結婚式に来てたでしょ？私たちもそこにいたのよ」と話してくれた。N集落のすぐ近くに結婚式場があり、私はそこで披露宴に参加したことがある。

この家に住む49歳の女性は、追放後プッタラムで1年ほど避難生活を送ったのち、漁師の夫と子どもとともに帰還した。両親がN集落到住んでおりプッタラムには時々訪



写真1 中東の支援で建てられた住宅

問するという。N集落の人々については「向こうが気に入っていると言っているよ。家を建てて幸せに暮らしているし、子どももいるしね。N集落で子の結婚相手を探しても、向こうで家を建てるように言われるんだ」と笑いながら話していた。帰還後の経緯を聞いてると相当の苦労もあったようだが「私たちはここが好きなんだ」という言葉が印象に残った。

### 「新しい場所のよう」

数軒を訪ねお昼をまわったところ、訪問を約束していたAさんによく会うことができた。36歳のAさんは、3年前にできた女子マドラサに2人の娘を通わせるため、三輪タクシー運転手の夫とともに1年半前にN集落から移住した。プッタラムのマドラサよりも費用が安くよいのだという。AさんはN集落に結婚時に建てた家があり、娘の就学が終わればそちらに戻るつもりだ。自身と夫の親や兄弟もN集落に住んでいる。プッタラムでの暮らしと比べると、こちらの方が

不便だという。幼少期に故郷を離れたAさんにとって、ここは「新しい場所のよう」だといい、N集落と比べて知人も少なく生活面で困ることもあるそうだ。

内戦中の帰還と比較すると、内戦終結後の移住にはよりさまざまな背景があるようだった。話を聞いた人々の中には、愛着をもつ故郷での生活を望んで帰還した人々もいれば、就学・就労のための帰還や一時的な滞在をする人々もいた。

Aさんの案内で娘の通うマドラサに連れて行ってもらった。寄進されたその住宅の元所有者は現在コロンボで暮らしているという。出会った4人の女性の先生は20～30代とみな若かった。話を聞いた2人の先生は避難後プッタラムで育ち、同じくE集落出身の親をもちプッタラムで育った夫と結婚後、夫の仕事の都合で数年前にE集落に移住したという。「こことプッタラムとどちらが好き？」と尋ねると、笑って「夫のいるところにいなきゃならないからね」と返された。先生同士の仲のよい雰囲気や、仕事についての話しぶりからは充実した様子が伝わってきた。

### 「生まれた土を忘れてはならない」

最後に訪問したのは72歳の老夫婦の家だった。二人はともに定年まで教員として勤めあげ、6人の子どものもみな教員をしている。妻のHさんはプッタラムに避難した数ヵ月後に政府に異動を言い渡されてE集落に帰還し、2年ほどそこで暮らした経験をもつ。その後プッタラムに異動となり、内戦終結の翌年に夫とともに結婚時に建てた家に帰還し

た。内戦中数人の先生と帰還した当時、LTTEはいなくなっていたが、政府軍が滞在していたため学校で寝泊まりしていたこと、仕事のために男性が徐々に帰還を始め、その後少しずつ学校に子どもが戻ってきたことなどを話してくれた。

「私たちはもうここから離れることはない。生まれた場所でしょう。」Hさんは、高齢で移動も大変だし…と言いつつ「死ぬときは自分たちの土地で死ぬべきだ。母親と生まれた土のことは忘れてはならない」と、はっきりとした口調で言った。「E集落は小さいけれど発展した村なんだ。」「みなよく勉強した人たちだ。」Hさんの言葉からは、故郷への誇りが感じられた。

別れ際に握手をした時、Hさんは両手にぎゅっと力を込めて「この話は日本人たちのために話したんだ。役所に聞いてもらうためじゃない。立派な本にしないといけないよ」と言った。

#### おわりに

帰り道、フィールドで出会った人やこれから出会う人たちのことを考えながらHさんの別れ際の言葉を思い出し、身の引き締まる思いがした。

たった1日の訪問だったが、E集落で出会った人々とプッタラム、特にN集落とのつながりが私には印象的だった。プッタラムで生まれ育った世代にとっても、親たちの故郷は就労・就学機会や結婚相手を得られる場として認識されていた。E集落の人々にとってのプッタラムも同様といえる。強

制移住や帰還によって故郷と避難先との関係が切れるわけではなく、親族関係などを通じて「故郷」のような空間がより広がりをもつものになっているのかもしれない。こうした状況の背景には、内戦終結により北部州との自由な往来が可能になったことがあるだろう。

一方で、もうひとつ印象的だったのは、同じ故郷をもつ人々の間でも共有されていない経験や思いが多いのではないかということだ。途中からAさんと一緒に近所の人々の経験を聞く中で、Aさんも知らなかった話に驚く場面がたびたびあった。北部州出身のムスリムといっても、現在までの経験は一様ではない。紛争を経験しなかったシンハラ多数派地域の避難先の人々にとっては、彼らの境遇を理解するのはさらに困難だろう。

この境遇を共有しないプッタラムの人々との会話では、北部州出身のムスリムが「避難民」として支援の恩恵を受けてきた（ように見える）ことへの複雑な感情の表明や、彼らのことを「よそ者」だというニュアンスで話す場面があった。その時に地元の人が引き合いに出すのが、彼らは故郷とプッタラムを「行ったり来たりしている」という話だ。彼らが築いてきたプッタラムと故郷とのつながりは、地元住民にとっては複雑な感情を喚起させるものなのかもしれない。

一方で、そうした複雑な感情を抱えつつも、北部州出身のムスリムの人々と地元住民が地域でともに暮らす中で関係性を築いている様子を垣間見る場面もあった。そうした北部州出身のムスリムの人々とプッタラムの

人々とのつながりについては、また改めて論  
じることにしたい。

#### 引用文献

Department of Census & Statistics, Ministry of

Policy Planning and Economic Affairs. 2015.  
Census of Population and Housing 2012.  
<[http://www.statistics.gov.lk/pophousat/  
cph2011/pages/activities/reports/finalreport/  
finalreporte.pdf](http://www.statistics.gov.lk/pophousat/cph2011/pages/activities/reports/finalreport/finalreporte.pdf)> (2022年5月16日)

---

## 世代を超えて継承された相互扶助「結」

—世界遺産白川郷における人々の語りに着目して—

奥田真由\*

深々と雪が降り積もる2021年1月19日、  
筆者は岐阜県大野郡白川村荻町を訪れた。前  
日の大雪により路側帯には雪が高く積み上げ  
られ、時刻は午後7時前であったがあたり  
は暗く静まりかえっていた。

白川村荻町は「白川郷」という名で知られ  
ている一大観光地であり、その名前を聞けば  
大きな合掌造り家屋を思い浮かべる人も多  
いであろう。白川村は岐阜県の北西部に位置  
しており、庄川流域に集落は点在している。荻  
町はちょうどその中間に位置する集落であ  
る。一般的に白川郷と呼ばれるのは白川村の  
なかでも荻町のことであり、地域住民は観光  
業に従事あるいは関係している者がほとんど  
である。荻町では1965年前後から観光客が  
徐々に増加し、その後合掌造り家屋の民宿や  
飲食店、土産物屋は増加し現在に至る。新型

コロナウイルスによる影響を受ける前の  
2019年、荻町では過去最高の観光客数であ  
る約215万人を記録した。

筆者は荻町でのフィールドワークを通して  
人々の生活空間、つまり居住環境ともいえる  
合掌造り家屋がそのまま観光資源となった過



写真1 荻町区一望風景

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

程での葛藤や、観光地化していく激動のなかで生まれた住民間の軋轢を人々の語りから垣間見ることができた。筆者は調査をはじめた9日目の1月27日、偶然にも多種多様な背景と経験をもつ3人の荻町住民と出会った。その日得た彼らの語りから、白川郷の「守り受け継いできた伝統」といった美しい幻想のなかにある、人々の内情を見出していきたい。



写真2 荻町区にある数少ない共有茅場

### 若手茅葺き職人による語りから

その日筆者は交流のあった白川村役場の人より若手茅葺き職人を紹介してもらい、荻町のはずれにある作業場兼倉庫の場所を教してもらった。午前10時頃、筆者はやや緊張した面持ちでその場を訪れた。作業場にはさまざまな道具類と茅が積み上げられ、3人の茅葺き職人が筆者を迎え入れてくれた。筆者はそのなかでK氏（当時36歳）に詳しく話を伺うことができた。

K氏は荻町に生まれ、茅葺き職人となる前は白川村内の建設業者で働いていた。しかしK氏には「白川でカヤを作りたい」という積年の思いがあり、茅葺き職人となったのである。というのも現在白川村では、年間消費量の約2割ほどしか茅の自給ができておらず、その他8割程度はほぼ静岡県の茅生産業者から購入したものを使用している状況である。以前荻町では、どの家庭でも茅場を所有し茅頼母子講というものを組むことで茅を融通させていた。つまり集落環境のなかに茅場が当たり前のように存在し、生活サイクルの

なかに茅刈りなどの作業が組み込まれていたのである。K氏には以前のような集落環境を再生させ、白川の茅で屋根を葺いていきたいという思いがあった。K氏の語りからは先代から受け継いだものへの畏敬の念と、世界遺産地としての集落環境維持への責任が感じられた。

さらにK氏は後世に伝えていくべきもののなかに、相互扶助「結」<sup>1)</sup>を挙げた。白川村では現在、合掌家屋の屋根の葺き替え時にのみ、「結」が見受けられる。荻町では年に3棟ほどの合掌造り家屋が「結」で葺き替えられているが、家屋によってその規模は異なり、大きいものであると荻町中さらには白川村内から人が集められる。K氏の語りのなかでは、「結は自分たちの代で絶やしてはならない」という言葉があった。K氏のなかには、「結」というものが純然たる相互扶助として存在しているのではなく、後世へ受け継いでいくべき「伝統」として存在していたの

1) 恩田守雄 [2015: 63] によれば、ユイは日本村落各地にみられた互助慣行のひとつであり労働力を交換する「互酬的行為」であるとされている。

である。つまり「結」は、人と人との助け合いのためという美しいものではなく、絶やすことのできない人々の繋がりへと変貌していったのである。

そして筆者はK氏に、「昔のことが聞きたかったら白川の生き字引を紹介するよ」と言われ、2人目の地域住民のもとへ案内された。

#### 「生き字引」と呼ばれた老人の語りから

「生き字引」として紹介されたのは、生まれてから現在まで荻町に居住するF氏（当時87歳）である。筆者は荻町のちょうど中間あたりに位置する平屋へ案内されると、家のなかにはF氏ひとりだけであった。F氏は最初、得体の知れないよそ者である筆者を訝しげに見る様子であったが、とにかく荻町のことなんでも知りたいんだと伝えると嬉しそうに、そしてなつかしげに語りはじめた。F氏は「白川の昔を知っている者はもう自分以外いない。みんなもう死んでしまったからな」と言った。

まずF氏の背景に着目すると、若い頃は郵便局員として勤務した後、荻町区内の合掌造り家屋で4年ほど前まで土産物屋を営んでいた。現在はそちらを身内に譲り、自身は非合掌造り家屋に居住しながら自由気ままに老後生活を送っている。若い頃は合掌造り家屋の葺き替え時に現在の茅葺き職人のようになりーダー的立場で指揮を執ったり、観光地化に向けて周囲を先導したりと荻町の自治に積極的に関わってきた人物である。

F氏の語りのなかでは「結」に関して、「至極当たり前のもので体のなかにあるもの」

といった表現がなされた。F氏にとっての「結」は、生活の一部にある「当たり前のもの」として存在していたのである。しかし同時にF氏は、荻町の住民間で観光地化とともに「結」に関する認識にズレが生じてきたこと、それとともに生まれた軋轢について語った。

F氏によれば荻町が1976年に重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建とする）に選定される前、合掌造り家屋保有者と非合掌造り保有者の間で軋轢が生まれたという。それは合掌造り家屋を保有しているか保有していないかによって、重伝建選定により受けるメリットに差があることによるものであった。つまり非保有者にとっては、重伝建選定による利点はないにもかかわらず、住居の改築や居住環境の改修における制約が課されはじめたという。非保有者にとってはむしろ煩わしいものでしかないと思われていた。F氏より少し若い世代の合掌家屋非保有者の間では、「結」を行なうとなっても「なんで自分たちも行かなきゃいけないんだ」といった不満が生まれていたのである。制約は増える一方で自分たちには何も利益がなく、その恩恵を受ける保有者のために「結」を行なわねばならないというのは確かに大変なことである。しかしF氏は当時、「結」を執り仕切る立場にあり、観光地化を推し進めるべきといった意見をもつ自分のもとの、そのような声は届かなかったとも語った。

しかしその後、重伝建選定の影響により次第に観光客が増加しはじめ、その恩恵は非保有者の間にも共有されることとなったのであ

る。F氏によると、この頃から荻町内で観光客を相手にしたお店が急増し、「荻町がどんどん移り変わっていき楽しかった」と語った。

F氏によると、荻町住民の間で「結」に対する認識は3段階に分かれているという。自身の世代は「当たり前」のものとして「結」が染みついており、F氏自身より少し若い世代、つまり現在の60～70代に至っては「なぜ自分も」といった考えを経験していると語る。さらにその下の世代になると「守るべきもの」といった認識しかないのではないか、とF氏は語る。この最も下の世代における認識は、確かに1人目のK氏の語りからも同様にうかがえたものである。

筆者はそこで、F氏自身は合掌家屋非所有者であるが「結」に行くことに疑問を感じたことはないのかと尋ねた。するとF氏は自身の経験を語ってくれた。

F氏がいつものように「結」で屋根を葺いていたある時、後ろを振り返ると自分のあとに付いてきてくれている人がいないことに気づいたという。そこでF氏は「結」が途絶えることに対して何ともいえない感情が湧いたそうだ。さらに、「あの頃は茅はたくさんあったが、自分に付いてきてくれる人は減ってしまっていた。だけど今は茅はないが、みんな『結』を守ろうとしている」と語った。

F氏は現在の「結」への認識が自分たちの世代とはだいぶかけ離れており美しいものとして捉えられ始めていることももちろん理解している。しかしそのうえでK氏のような若手茅葺き職人により従来の「結」としての葺き替え方法が守られ受け継がれていること

に、誇りを感じていることも事実なのである。

そしてF氏はその場で荻町でも最大級の合掌造り家屋の所有者に連絡を取り継いでくれ、そのまま伺うこととなった。

#### 荻町最大級の合掌家屋当主の語りから

そういった経緯で筆者が訪れたのは、F氏の平屋から徒歩3分程度にある、O家である。O家の合掌造り家屋は5階建てであり遠目からでもその規模の大きさがわかるほどだ。O家は普段観光施設として開放されており、なかの様子を見ることができる。昔の白川村における季節ごとの農作業や養蚕の様子、その際に使用する用具などが展示されている。そのほか、合掌造り家屋の構造がわかりやすく展示され、その部位の説明や屋根葺きに使う道具などもある。

現在O家にはその当主と当主の母が居住



写真3 O氏居住の合掌造り家屋

している。そのため観光施設と居住スペースが一体となっている。これは荻町において特段珍しい光景ではない。その日〇家には現当主がいらっしゃり、囲炉裏のある部屋にてお話を聞くこととなった。

〇家の当主（当時60歳）は進学のため一度荻町を離れ、その後荻町に戻ってきて現在に至る。〇家は上記したように荻町のなかでも大規模な合掌造り家屋であるため、「結」を行なうとなると相当な労働力を要する。〇氏は「結」について、「今と昔で考え方も変わってきた。…（中略）…けれど『モノ』だけを残しても意味は無い。自分たちで汗かいてやらないと残していく意味がない」と語った。

さらに〇氏は、「結」で屋根葺きをすることが以前より減少したことにより、保有者と非保有者の間に隔離が生じていることについても語った。現在保有者に至っては、荻町では「合掌造り保存組合」というものが組織化され、保有者のみが組合員となり「結」を行なうときは半強制的に出役することとなっている。しかし非保有者に至ってはその義務はなく、完全に個人の付き合い等に委ねられているのである。〇氏によると、非保有者の間の葛藤として、「自分たちが半人足<sup>2)</sup>で行くのもどうだろうか。手伝うとその分お返しもあるから、声がかからなかったら行かない」

といったことがあるという。荻町では「結」の機会が減少していることにより技術の伝承がうまくいかず、非保有者の間で「結」へ行くことに遠慮が生まれていたのである。

つまり観光地化されていった激動の時代だけでなく現代においても、「結」にまつわる軋轢が荻町住民間で生じていたのである。

### 世代を超えて

このように筆者が出会った3人の荻町住民は、それぞれに「結」に対する認識が異なっていた。自身が居住している家屋によって、「結」の場での経験によって、自身の生業によって、それは三者三様となっていた。そしていつの時代でも人々の間では「結」に対しての葛藤が渦巻いている。しかしそのようななか、現代では皆一様に「結」の存続を願っている。「結」が純粹な人々の助け合いである相互扶助を指しておらずとも、「結」を次世代へ繋げていかねばならない、「結」を絶やしてはならないと人々は語る。「結」はいつの時代も人々の心を強く揺さぶり、しかしその一方で拠り所として存在しているのかもしれない。

### 引用文献

恩田守雄. 2015. 「東アジアの互助社会—日本と韓国, 中国, 台湾との互助ネットワークの比較」『社会学部論叢』26(1): 61-97.

2) 技術が足りないこと。

## 夢を追う人

—セネガルのグラフィティから沖縄の焼物へ—

前 田 夢 子 \*

公共空間に落書きする行為や落書きそのものを総称してグラフィティと呼ぶ。グラフィティは、日本はもちろん、多くの国で観察できる現象である。グラフィティの中には「マスターピース」と呼ばれる装飾性や芸術性の高いものもあれば、装飾を施さず、マーカーやスプレーなどで文字やサインを描く「タグ」など多様なスタイルがある。私の調査地であるセネガル共和国（以下セネガル）でも同様に、芸術性の高いものから、宗教的アイコンを描いたもの、さらには何を書いているのかよくわからない落書きまで、無数のグラ



写真 1 COVID-19 感染拡大防止を目的に描かれたグラフィティ

出所：画像引用〈<https://www.instagram.com/p/B-OhVTvn6wfi/>〉

フィティが存在する。芸術に造詣の深かったセネガルの初代大統領サンゴールは、国家予算を公共施設の建築装飾に充てるなど、文化芸術の振興を積極的行なった。現在でもセネガルはグラフィティ活動に法的罰則が科されない珍しい国であり、誰もが白昼堂々とグラフィティを描くことができる。そして、描き手の中には集団を組織している人々がおり、その集団内には緩やかな徒弟制が存在する。

### セネガルから沖縄へ

セネガルにおいてグラフィティの「描き手」と地域住民ら「読み手」との相互作用の動態を研究するため、私は ASAFAS に入学をした。しかし、入学直後から新型コロナウイルス感染拡大による各国の渡航制限を受け、セネガルへの入国ができなくなってしまった。そこで、私は調査地を沖縄県に変更し、「やちむん」と呼ばれる焼物の職人見習いの調査をすることにした。

セネガルのグラフィティと、沖縄の焼物職人は一見何の共通性もないように感じられるかもしれない。しかし、上述のようにセネガルでは壁に絵を描く集団が存在し、そこには緩やかな徒弟制が敷かれている。沖縄の焼物

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真2 工房Aで販売されている焼物

も、国内の窯業地では今では珍しくなった徒弟制を用いて技術習得を継続させている。見習いとして当該集団に新規参入する人々はそのような思いで弟子入りし、日々どのような暮らしをし、どのような夢を追っているのか。その実態を調査するために、私は沖縄へと向かった。

### 沖縄での調査

私が調査地として選んだ場所は、沖縄本島中部西海岸に位置する読谷村という村である。沖縄県那覇市には、「壺屋」と呼ばれる17世紀以降現在まで続く焼物の生産地が存在する。壺屋は琉球王朝時代から、琉球王国や庶民の食生活を支え、過酷な沖縄戦直後にはいち早く窯業を再開した。しかし戦後しばらくすると、那覇市の住宅地過密化や、焼成時に登り窯から排出される煙が公害問題として取り上げられたことにより、壺屋で長らく焼物を作っていた人々は1970年代以降、読谷村やそのほかの地に窯を移設していった。私の主な調査地となった読谷村には現在、村内に64の工房が存在する新たな焼物生産地

となっている [読谷村 2019: 15]。

私は上述のような背景を有する同村内の工房Aで、2021年2月1日から2月28日、および8月2日から8月12日の合計38日間見習いとして働きながら調査を行なった。工房Aは親方、工房長、職人2名、そして4名の見習いに、14名のパートの計22名からなっていた。<sup>1)</sup> 今まで陶芸に携わってこなかった私にとって、見習い生活は新たな学びの連続であった。

### 見習い生活

工房Aの見習いの就業時間は、月曜日から土曜日の8時30分から18時までである。そして終業後、見習いは各自の技術力を磨くために工房に残り、練習を重ねていく。見習いをはじめてすぐは土の扱い方や、土がどのように飛び散るのが全く予想できず、私は毎日頭の前から足のつま先まで泥だらけになっていた。

見習いは最初、雑用とも捉えられるような作業をひたすら行なう。たとえば、工房Aでは、土練機と呼ばれる機械で粘土を作っていた。ところてんのように土練機の口から出て来た粘土を、当工房では男性の手のひら2枚分ほどの長さで切っていく。これは1本約15キロあり、それを地面に積んでいく。職人が壺を作る際、見習いは「玉づくり」と呼ばれる作業を頼まれる。これは、作る壺の大きさに合わせて、必要な土を「しっぴき」と呼ばれるワイヤーやテグスで作られた道具

1) 2021年2月の調査時の人数。2回目の調査時には工房構成員に若干の変化があった。



写真3 インチャクナサー（土を足で踏み陶土を作る作業）をする筆者

で切り分け、粘土の角を潰していく作業である。この作業を行なうには、地面に積まれた約15キロの粘土を作業台へ持ち上げる必要がある。こういった、工房長や職人からの頼まれ仕事に付随する些細な作業が、案外筋力を要するのである。しかし同時に、見習いにとってこのような作業こそが土の扱い方、自身の体の動かし方を学ぶ機会となる。柔らかくはないが力を籠めすぎると変形してしまう土塊をどのようにして持つのか、また、その際どこに力を入れれば腰やひざを痛めることなく運ぶことができるのか。そういった知識や技術を日々の作業で体得していく。見習いをはじめたばかりの頃は毎日体のどこかが筋肉痛だったが、慣れてくると力の抜き方もわかるようになった。また、先輩たちの体の動きを参考にしたり、直接聞いたりすること

で、徐々に作業をこなすことができるようになっていった。

### 見習いの語り

このように、短いながらも職人さんや見習いの方々とともに働く中で、あるいはインタビュー調査の中で、彼ら彼女らは私にそれぞれのライフストーリーを話してくれた。工房Aの4名の見習いの出身地は、埼玉県、神奈川県、兵庫県、沖縄県、年齢も20代から40代までバラバラであった。また、見習いになるまでの前職も多様で、沖縄の焼物との出会いや目指す夢も多様であった。たとえば、工房Aで働く見習いAさんは、カンボジアを旅行中、現地ではすでに伝統が途絶えてしまった焼物を再興しようと奮闘している日本人陶芸家に出会った体験をきっかけに、焼物に興味を抱いたと語ってくれた。

また、工房Bで働くBさんは、陶芸の道に進んだ経緯を以下のように話してくれた。「工房の器に出会って、やりたいなあと思って。今までそんな器を集めたりとか、そこまで意識なかったですけど（中略）いいなーと思って、すごく沖縄の風土に合うなーと思って。」

あるいは、工房Dの見習いPさんに見習いを続けるモチベーションを尋ねた際、Pさんは以下のように語ってくれた。

「今絶対やろうと思ってるのは、薪窯で、ちょっと燃やしきれなかった遺品を使い燃料にして、自分の父親の仏具を作る（という目標）。」

これらの語りからは、見習い個人が個別具体的な背景や動機をもって沖縄で陶芸に携

わっていることがわかる。そして、そのように多様な人々が、焼物を焼き上げるというひとつの目標に向かって日々切磋琢磨をしている。彼ら彼女らの焼物に対する真摯な態度に触れるたび、私自身、焼物ひとつひとつに愛着が増していった。

一方で、現実には時にどうしようもなく私たちを傷つける。工房 A の工房長は、焼物業界の厳しさをこのように語ってくれた。

「この世界は技術があっても、それで独立をしたとしても、5年10年続けられるかっていうのは相当厳しい世界。」

工房長は、彼の先輩や後輩、友人の多くが独立までいかなかったことや、独立ができて体調を崩して地元に戻ってしまったことを話しながら、焼物業界で生き抜くことの難しさを私に説明してくれた。

また、別の工房 B の親方も、「辞めていく人もたくさんいるのか」という私の問いに対し、以下のように語ってくれた。

「不思議なもんでね（中略）本当に才能はあるんだけど、家庭環境とか、彼らを取り巻く環境がね、独立をさせてくれないというものもあるし…体は弱いとかね。」

このように、本人の情熱や才能だけではどうにもならない要因により、見習いの継続やその後の独立が困難になることがよくあるの

である。焼物業界で生き延びるには、健康や運に恵まれることも重要なのだろう。

#### おわりに

調査をとおして、私は自身と同じように夢を抱く同年代の方々と知り合うことができた。彼ら彼女らは胸いっぱい夢を抱き、尽きることのない不安を打ち消すように毎日ろくろや土に向かっていた。その姿は、日々デスクに向かい研究を続ける私たち大学院生と共通する部分があるように感じられた。セネガルでグラフィティを描く彼ら彼女らも同じように、不安や葛藤を抱えながらスプレーや筆を手に壁と向き合っているのだろうか。それとも、天の采配に身を任せ、軽やかにその身体を動かしているのだろうか。

2022年6月から、私は3年ぶりにセネガルへ調査に行く。不確定な未来に不安と期待を覚えながら、夢を追う人を追うために。

#### 引用文献

- Rabine, L. 2014. These Walls Belong to Everybody: The Graffiti Art Movement in Dakar, *African Studies Quarterly* 4(3): 89-112.
- 大山エンリコイサム. 2015. 『アゲインスト・リテラシーグラフィティ文化論』LIXIL 出版.
- 読谷村. 2019. 『令和元年度読谷村村勢要覧』沖縄県読谷村村役場.

## 癒しを求めて

—トルコの「スピリチュアル」な人々—

真 殿 琴 子 \*

死んだらどうなるの？

「最近、輪廻は合理的だと考えるようになった」と友人は告白してきた。「イスラームを学ぶあなたを混乱させないといいんだけど」という前置きつきの突然の告白に私は驚きつつも高揚した。出会った当初より彼女のことはトルコ女性文化協会（Türk Kadınlar Kültür Derneği）<sup>1)</sup>のブルサ支部のメンバーで、メッカへも2回行ったことがある比較的熱心なムスリマだと知っている。夫を亡くしてから臨死体験に興味をもつようになり、精神世界への扉が開かれたと語ってくれたことがある。スーフィズムへの傾倒もそのような流れの延長線上にあったと教えてくれた。そんな彼女の告白はコロナ禍を経て、彼女の長年にわたる“探求”に進展があったことを示していた。無論、輪廻はイスラームの教義に反することである。<sup>2)</sup>「あなたの国では人は死んだらどうなるの」という彼女の問いは

切実なものとして聞こえた。知る限りの日本人の死生観について話すと彼女は喜んでくれた。そして、最近視聴し始めたというYouTubeのチャンネルをいくつか教えてくれた。そのことは彼女にとって“秘密”であった。彼女の属するコミュニティにおいて彼女たちが支援する「先生」<sup>3)</sup>の存在は絶対であるからだ。コロナ禍での一番の変化はネット配信をとおして他の分野の先生の話聞き始めたこと、そしてこれまでの信念にも色々な形で疑いが生まれてきたこと、と話してくれた。また、彼女は同時にコロナワクチンや国際政治に関する陰謀論やメタバース、並行世界の存在に関心を抱いていた。そして興味深いことに、自我の把握できない想像や記憶の源泉である無意識やバーチャル空間、複数の世界線の存在について考えるうちにスーフィズムで説かれる多層的な「世界」（âlem）との関連性がみえてきたという。「息

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

- 1) 1966年に首都アンカラを拠点として、作家であり、ケナン・リファーイー（1950年没）の教え子のひとり自身もスーフィーであったサーミハ・アイヴェルディ（1993年没）によって創始された文化保護や教育推進などを目的とした慈善的団体。会員の多くは女性であり、アイヴェルディの教え子であり、同協会のイスタンブール支部のリーダーを務める女性作家でありスーフィー思想家／教育者であるジェマルヌル・サルグットの活動の支援者が大多数を占める。
- 2) 輪廻を肯定すると終末に復活して裁きを受けの際に、裁きの公正さが維持できないとしてイスラームの教義では基本的には否定されている〔鎌田 2002: 1053〕。
- 3) 1925年以降、スーフィーたちの活動が公的に規制されているトルコでは Şeyh や Mürşit といったスーフィズムにおける“師匠”を彷彿とさせる呼称を公に自称／他称として用いる人はほとんどいない。その代わりに、多くは「先生」を意味する Hoca（一部では Üstad）を用いる。

子のVRゴーグルを借りて目にした仮想現実  
は不可視界 (gayb ‘âlemi)<sup>4)</sup> なんじゃないか  
と思えた」と語る彼女の表情からは静かな興  
奮が伝わってきた。

### 「スピリチュアル」な人々

近年トルコでは自己啓発やメンタルケアを  
目的として瞑想やマインドフルネス、ヨガの  
効果が広く受け入れられるようになり、多様  
な「スピリチュアル」(トルコ語でも Spirituel  
が日本語の用法と同じように使われている)  
な知識も知られ始めている。私が確認した限  
りでは、レイキ (Reiki) やバイオエネルギー  
(Bioenerji) と名前がついたもののほかには、  
手かざし (直接あるいは遠隔) による痛みの  
除去や所定の場所 (頭頂部や胸のあたり) を  
繰り返し叩くことでトラウマ解消になると  
いった民間療法が実際に行なわれているとの  
ことであった。その他、蜂蜜やプロポリスな  
どを用いる蜜蜂療法 (Apiterapi) や治癒の  
石 (şifa taşı) と呼ばれる石を含むさまざ  
まな天然石や鉱物の効果が注目されるなど、実  
にさまざまな方法で人々が「癒し」を求めて  
いることが分かった。それらは、トルコでも  
イスラーム法に適した療法として普及してい  
る瀉血 (hacamat) 等の伝統医療とは異な  
り、必ずしも宗教的な正しさが問われるわけ  
ではないようだった。その担い手が心理士  
(psikolog) を名乗る例も散見され、そのよ  
うな状況は日本におけるトランスパーソナル  
心理学を取り巻く状況とパラレルな関係にあ

るようにみえた。しかし、日本のスピリチュ  
アルブームと異なるのは、いくら世俗国家で  
あるとはいえ、国民の大多数がムスリムであ  
るという事実がこれらの言説の広まり方にも  
緊張感を与えているという点である。癒しを  
もたらすのは「治癒者」(şifa) ではなく、あ  
くまでも神であるという見解は誰にとっても  
確固たる理屈であった。また、ネット上に現  
れる術者たちがどの肩書きを自称するかにつ  
いては日本の同様の界限以上に注意が払われ  
ているようにみえた。こういったトルコのスピ  
リチュアル界限(「市場」といった方が的確  
かもしれない)の急速な発達を、私は自分  
のルームメイトの“探求”のうちにも見出  
していた。

### 探求は続く

私と同年である彼女は、出会ったその日  
にバイオエネルギーの存在について話してく  
れた。「自分には霊的な力がある」という彼



写真1 とりなしを求めて聖者を訪れる人々(ブ  
ルサ、テズヴェレン・デデの墓廟)

4) クルアーンにおいて現象界の対義語として言及される、神が自身の下僕である人間にはみえないように隠した世界 ('âlam al-ghayb) のこと。

女の言葉は決して嘘ではないようにみえた。大学で心理学の学位を修めた彼女は立派なカウンセラーとして、そして友人としてよく話を聞いてくれ、渡航前に何度か個人的に「セッション」(seans)を受けさせてもらった。そのセッションではカウンセリングと瞑想がセットで、瞑想中は彼女が遠隔でエネルギーを送りながら、「チャクラ調整」(çakra dengeleme) や「無意識の浄化」(bilinçaltı temizliği) などの施術をしてくれた。術後は喉が渇いたり眠気に襲われたり、全体の施術後のような身軽さを感じたりもした。それから 2021 年秋イスタンブルへ渡り、彼女と同居を始めてから彼女がどんな方法論を用いていたのかを知った。彼女は、大学で学んだ心理学の知識とシータ・ヒーリング (Theta Healing) —友人やその周りの人は皆それを「テタ」(Teta) と呼んでいた—というテクニックを併用しながら、独立した心理士／治療者としてトルコ国内・国外問わず、友人の紹介をつうじて繋がった相談者 (danışan) たちを受けもっていたのだ。

彼女が主な手法として採用していたシータ・ヒーリングとは瞑想のテクニックのひとつであり、創始者は Vianna Stibal というアメリカを拠点とする女性である。彼女の著作は日本語でも何冊か翻訳されている。文字数の関係上、このテクニックがいかなるものであるかという説明は割愛するが、術者になるためにはその専門的知識を科目 (いずれもトルコ語に翻訳された教科書が存在する) ごと

に修了する必要がある、トルコでもイスタンブルなど都市部を中心にアカデミーが増え始めているとのことだった。友人曰く、彼女の「テタ」の先生 (女性の術師) は元々イブン・アラビー思想に詳しい神学者 (ilahiyyatçı) でイスラームの教義には大変深く通底しているとのことであった。友人は先生の受け売りで「預言者スレイマンは動物と話すことができた、彼が人類で初めてのテタの使い手である」、従って「テタ」はイスラームの教義の外にあるものではなく、名前がつく前からこの世に存在していたと度々強調した。また、その教えのうちにある“前世からの影響”という要素は“先祖たち (atalar) からの影響”と置き換えられていることも確認した。先祖の経験が現代を生きる我々の無意識下に刻まれ、身に覚えのない固定観念の原因となっているのだそうだ。ある日「テタ」によって友人の先祖に古代ギリシアの哲学者や黒海沿岸の魔女がいることが判明するなど、冗談抜きで「テタ」をつうじて「創造主」(Yaradan)<sup>5)</sup> がそれをみせたとして、彼女の無意識に眠るあらゆる“真実”が明るみになった。私は「カルマ」の仕組みと何が違うのかと疑問に思いながらも、彼女の気づきには同意も否定もしなかった。「テタ」とスーフィズムの共通点があるとすれば、師弟関係を絶対とする教育体制 (それもビジネスの手法であるようにみえた) くらいで、そのほか

5) なぜか「アッラー」とは呼ばない。シータ・ヒーリングの術者同士の会話には英語から翻訳された専門用語とアフメーションの効果を取り入れた独特の話し方が共通してみられた。

スとして扱っていたのは興味をひいた。「テタ」自体は科学を模倣した擬似医療であるようにみえた。しかし、友人の霊的な施術に救われたかつての自分の存在も事実であった。

トルコでの滞在が3ヵ月を過ぎる頃には私はブルサへ移り、その期間はルームメイトの状況を詳しく聞くことはなかった。再び彼女を尋ねた時には「テタ」を辞めたことを告げられた。先生への不信感からそのように決心したとのことであった。これからどうするのか尋ねる私に対して彼女は「次は量子力学(Kuantum)の先生からセッションを受けてみるつもり」と返した。そして『量子力学・スーフイズム』[Tuncay 2019]というタイトルの本を勧められた。ここから先は正直私には手に負えないと思ったが、誰にとっても“探求”は続いていると感じた瞬間であった。



写真2 タスビーフ(数珠)を用いてダウジングを行なう友人

#### 引用文献

- 鎌田 繁. 2002. 「輪廻」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 1053-1054.  
Tuncay, Yalkın. 2019. *Kuantum Tasavvuf*. Istanbul: Az Kitap.

## 場所を与えられる, 持つということ

—福岡市・天神でのフィールドワークを通して—

北 條 七 彩 \*

### 安直な入り口

「屋台の研究をしているんです」と伝えると、大概の人に面白がられた。23歳の大学院生が、屋台の一席に陣取り、2021年10

月11日から12月19日までの70日間、福岡県天神でフィールドワークを実施したのである。筆者は都市や公共空間、場所の利用について関心があった。「アフリカ地域研究専

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

攻」に所属する身として、ケニア都市部の零細商人の研究を志していた。ケニアに渡航する前の訓練として、日本で調査ができないものかと考え、数年前に旅行で福岡を訪れた際に屋台でラーメンを一杯すすったことを思い出した。どうやら調べると、戦後のヤミ市から慣習的に存続してきたものが、行政の試みにより観光資源となり、最近では屋台の重要性が再認識されているらしい。歴史性、政治性、そして公共空間を利用し、商売を行なっているという点で、筆者の関心にぴたりと当てはまった。「面白いかも。」ひょんなことから国内での調査テーマを見つけ、屋台研究の暖簾をくぐった。

### 「空間」と「場所」

終始、昼夜逆転の調査だった。屋台は18時以降に開店し、営業は日付をまたぐ。17時になると一斉に歩道に屋台が並び始め、午前4時までには屋台は撤収する(写真1, 2, 3参照)。日中と夜の天神の街を歩くと、どうも同じ通りを歩いているとは思えない不思議な感覚のずれがあった。屋台は、おでんや焼

き鳥、ラーメンを提供するだけの、単なる胃袋を満たす場ではなく、都市に独特のにぎわいを生み出す[出口2004]。その独特さは、コの字型の密集した席が誘発する店主や客、客同士の会話から生まれる。日中には存在しなかったにぎわいが、屋台の出現によって生まれる。同じ「空間」であることには変わらないが、明らかに異なる「場所」に変化していた。

「空間」とはなにか。インゴルド[2021:345]は、「空間の世界とは、存在しつつあるような撚り糸によって織られているのではなく、存在する者によって満たされていて、



写真2 閉店後の屋台



写真1 18時頃の天神



写真3 17時に歩道に現れる屋台

居住されるのではなく占拠されるような世界」という。屋台空間でいう「存在する者」とは、店主や客だ。インゴルドの言葉を借りるとすれば、屋台を空間の世界として捉えると、彼らは居住者ではなく、占拠者になってしまう。

では、屋台を「場所」として捉えてみる。「場所とは結び目のようなもの」とインゴルドはいう。空間は屋台を均一化した建築物として捉え、空間をいかにして機能的・有効的に活用するかを問うてきた。福岡のみならず、東南アジアをはじめとした屋台研究が主に、建築学で研究蓄積があるのはそのためであろう。一方、屋台を場所として捉えると、撚り糸が結び目のように織られる。たしかに、店主を起点とした社会関係にもとづいて形成される屋台という「場所」は、多様な人の結節点のように思われた。筆者は、70日間の調査を通して、屋台内で結ばれている社会関係について、いくつかの興味深い点を発見した。

#### 通された席と与えられた場所

屋台のコの字型の座席は、どれも均一の単なる席ではないことを認識するのにそう時間はかからなかった。調査の初日、筆者は暖簾を潜り抜け、正面の席に通された。両端の席はすでに埋まっていた。正面の席のほうが、メニューは見やすく、ショーケースに並んだ焼き鳥もこちらを向いている。正面の席になぜ座る人がいなかったのか、筆者が調査ではじめに抱いた疑問だった。

店主と常連客にとって、両端の席は特別な

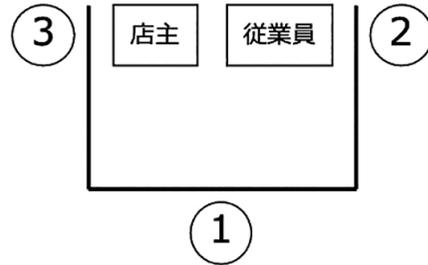


図1 筆者の座席位置の変化（1から順に変化）

なものだった。天神東地区に存在する屋台の店主のS氏は、「(客が) 入ってきた瞬間に席の配置を決める」という。新規（一見）客であれば、正面の席に通す。常連客が来た時のために、両端の席は空けておく。その時々状況に応じて通される客と、場所が与えられた常連客が座る椅子は違うように感じられた。

70日間の調査を通して、筆者が座る座席の位置も次第に変化した（図1参照）。正面の席から、従業員と会話がしやすい端の席、店主と会話することのできる左端の席へと移動した（図1）。筆者は調査中に、隣り合わせた客と会話をするが多かった。しかし、ひとりで来る客にとって、両端の席は居心地が良いものである。天神西地区にある屋台Bに来るF氏は、「ひとりで入るから、（正面の席だと）会話ができない時もあるけど、ここなら大将と会話ができる」という。常連客にとっても、屋台内の一席は決して均質な席ではない。

座席に対する店主と客の発言から、屋台を建築学が議論してきた「空間」として捉えるのではなく、インゴルドが提示する「存在する者」が結ばれたひとつの「場所」として理

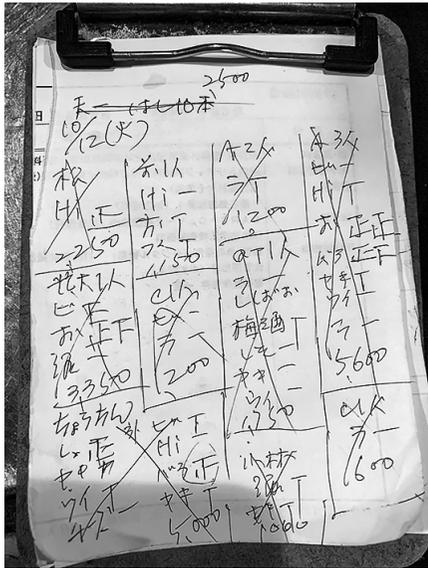


写真4 10月12日のある屋台の帳簿

解することはできないだろうか。調査中に筆者の問いはより具体的なものになった。

### 「京大」から「ななちゃん」へ

筆者が初めて屋台に入った10月11日、会計の帳簿には「京大」と書かれ、下に飲み物や食べ物の注文内容が書かれた。「京都大学の屋台の研究をしている学生」という立場を踏まえたものだった。筆者は異色の新規客だった。通常の新規客であれば、席番号やアルファベットで客を認識、区別する(写真4参照)。「A席に座った客」と認識される。そこに、客固有のアイデンティティはない。屋台Nに通うM氏は、「やっと顔と名前を覚えてもらった」と嬉しそうに語る。店主や従業員に名前を覚えてもらったあとは、帳簿に名前が書かれる。「A席に座った客」として

与えられた記号を脱ぎ捨て、「A席に座ったMさん」に変貌する。ちなみに筆者は、最終的に「ななちゃん」と帳簿に書かれた。23年間「ななちゃん」と呼ばれたことはなかった。少し気恥ずかしい感じもしたが、天神の屋台で新たに名を授かった気分だった。屋台で顔と名前を覚えてもらったことを嬉しそうに語る常連客の気持ちが少しわかった。

同じ屋台に何回通えば、個人的に認識されるのか。また名前と呼ばれるほどの関係性を築くにはどれくらいの時間を要するのか。「常連客」の線引きは曖昧なものであるが、何度も通うことで場所を与えられ、かつ名付けられることがひとつの指標であるようだ。

### 「自分の屋台」、自分の場所

屋台に入るために特別な資格は必要ない。老若男女問わず、お酒が好きな人も、そうでない人も、一堂に会する。福岡市[2018]の調査によると、屋台に行ったことがある福岡市民は7割を超えていた。しかし、7割という数字は「屋台経験層」に過ぎず、「年に数回も行かないが、今までに行ったことがある」人が経験層の8割を占める。つまり、多くの福岡市民にとって、屋台とは日常的に行く場所とはなっていない。月に数回以上利用する人「1ヵ月に平均4回以上行く」(0.3%)、「1ヵ月に平均1~3回行く」(0.9%)の割合は、合わせて1.2%に過ぎない。

客が座る席の位置や、帳簿に記入される客を表す呼称によって、筆者は常連客について述べてきた。1.2%の客が、他の客と「頻繁に訪れる」という条件のみで区別されるもの

ではない。屋台で席を与えられるということ、また承認されることを通して、常連客になる。「自分に合った屋台を見つけるといいよ」と屋台Nの常連客、O氏に言われたことを思い出す。O氏にとって、屋台Nが「自分の屋台」だ。屋台Kに来る常連客U氏は、「僕はここだけしか来ないっすね」とビールを飲みながら得意げに語ってくれた。U氏はテレビ局報道部の記者として、新入社員時代から、23年間屋台Kに通う常連客だ。「Kを日本一有名な屋台にしたい」と語り、屋台を取材するときは必ず、屋台Kに依頼している。

O氏やU氏にとって、それぞれの「屋台」は均一的な屋台を示すものではなく、「自分の屋台」として他の屋台とは区別されたものだ。店主が常連客に場所を与えると同時に、常連客も「自分の屋台」に「場所性」を見出している。

### 場所を持つということ

「人というものは、人として承認されること、換言すれば社会的成員権を承認されるということだ。物理的に述べると社会は一つの場所であるがゆえに、人の概念もまた場所依存的だ」と金 [2021: 59] は述べる。屋台は都市の装置として、にぎわいを創出し、にぎわいの主たる担い手は常連客であろう。常連客と店主との掛け合いに加わることを目的と

して、屋台に来る観光客もいる。金の言葉を借りるのであれば、「常連客」というあり方が屋台に対して「場所依存的」な存在なのかもしれない。何にでも転用可能な空間の一部としての屋台ではなく、「この店の常連」たらしめる要素をもったひとつの場所が福岡県・天神にはあった。

席を与えられ、店主に「ななちゃん」と呼ばれる。常連客と杯を交わし、初日には量が多過ぎて困った「焼きラーメン」を、自ら声をかけ横に座る女性2人客と分けて食べる。店主は筆者が席に座るや否や、わかったように冷えたグラスにハイボールを注ぐ。初めて「場所を持つ」入り口に立っている気がする。安直な気持ちで、屋台研究の暖簾に立った調査初日とはまた違う入り口だ。今回の調査で約半年ぶりに屋台の暖簾をくぐる。屋台は筆者をどのように受け入れるのだろうか。まずはそれを知りたい。

### 引用文献

- インゴルド、ティム。2021。『生きていること動く、知る、記述する』左右社。
- 金 賢京。2021。『人、場所、歓待—平等な社会のための3つの条件』青土社。
- 出口 敦。2004。「アジア的都市と屋台の魅力・活力・可能性」『エフ・ユー』1: 10-15。
- 福岡市。2018。「平成30年度 市政に関する意識調査」。

## トンレサープ湖

—人と自然の息づかいを感じる場所—

岡田 龍 樹\*

どこからか、小さな鳴き声のような、か細い歌のような声が聞こえた気がした。はじめは空耳かと思っていたが、その音はだんだんと大きくなってきた。近づいてくるその音の方角を見ると、かわいらしい女の子2人が小さなボートを漕ぎながら、ゆらゆら近づいてくる。青いペンキで塗ったのか、プラスチックなのか分からないが、ドラム缶を半分にしたような小さなボートに乗っている。前に座っているポニーテールの子が、パドルがわりの木を巧みに使って、ボートはくるくと近づいてくる。右に左に、ボートはパドルの力をダイレクトに受けて、大きく揺れる。ボートのゆれに合わせて、彼女たちの声も揺れている。はじめは空耳かと思って聞き流していた音は、どうやら彼女たちの歌う声だったようだ。とてもかわいらしい2人が、けなげにボートを漕ぎながら、歌っている。ただその声は、はつらつとした歌声ではない。無邪気で楽し気な歌でもない。なぜかもの悲しさを、寂しさを感じるような声だった。メロディーも哀愁が漂う、もの悲しいメロディーだった。

彼女たちは、「Give me one dollar」と何回も繰り返していた。はずかしそうなわけでも

なく、誰かにいやいややらされているわけでもなさそうだ。けれど、無邪気にいたずらをして無邪気に楽しんでいるわけでもない。ただただ「1ドルを頂戴」と歌っているのだ。彼女たちの仕事なのだろうか。でも強制された感じではない。ほかに遊ぶことがないのか、それとも、ひとつのイベントとして捉えているからなのか、めんどくさそうなそぶりは見られない。けれど決して無邪気で楽しそうな様子でもない。

彼女たちのボートが、僕のボートの横に到着した。彼女たちの顔は笑顔だった。満面の笑みではなく、はにかむような笑顔だった。そしてじっと僕たちを見ながら、「Give me one dollar」と歌っている。僕はどうしたらいいか分からず、その歌と、彼女たちの視線を1分ほどぼーっと聞いていた。

彼女たちは、僕たちからどうやらお金がもらえなさそうだと感じると、またくるくるとどこかへ船を漕いでいった。Give me one dollarの歌はもう歌っていなかったが、僕の頭の中では、メロディーが、彼女たちの姿が何度もリフレインしていた(写真1)。

僕を乗せて船はゆっくりと進んでいく。定員4人ほどの小さな船で、湖に浮かびなが

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ら生活する水上村を眺める。船首に座った漕ぎ手は、ゆっくりゆっくりパドルで漕いでいる。カメラを向けると、漕ぎ手の彼は振り返り、少しはにかんでお辞儀をしてくれた。1本のパドルで大人4人乗りの船をゆっくりと漕いでいく。2月は乾期だ。ちょうどお昼ご飯時で、よく晴れている。気温は30度前後、波はない。僕たちを乗せた船はゆっくりと進んでいく。

先ほどまで女の子たちに気を取られて、周りを見れていなかった。改めて見ると、湖の上にはいろんなものが浮かんでいる。右手に金網のかごが見える。4畳ぐらいの筏の上に設置されていて、天井部分は布で覆われ、中は日陰になっている。よく見ると、何やら動物を飼っているようだ。見た目はあひるのようだが、体は黒くて頭部が赤い鳥が飼われている。水上村の人々は、卵をとったり肉を食べたりするのだろうか。

けばけばしい黄色の建物が目についた。建物の大きさは10畳ほどだろうか。連結したドラム缶によって水上に浮かんでいる。建物



写真1 歌いながら近づく2人の少女

の両端で、ハイビスカスのような花が咲き誇っている。入口の左右には仏像が1体ずつあり、赤や金、黄色の布で飾られている。建物の中には、陰になって見づらいが、仏像らしきものが何体かある。どうやら寺院のようだ。寺院の正面には看板がかかっている。クメール語とベトナム語が書かれている。ベトナム語は「Chùa van su tan Minh」, 「神懇願する 僧侶 終わり 水上居民」と書いてあった。どうやらこの水上村には、クメールの人だけでなくベトナムの人々も住んでいるようだ(写真2)。

女の子がくるくると近づいてきた。今度は大きな鉄製のたらいにひとりで乗っている。鮮やかな蛍光黄色のパーカーを着ている。彼女は少し険しい顔をしている。歌うわけでもなく、じっと僕を見ている。そして多分クメール語で、「お金頂戴」と言ったのだろう。2回目なので、僕は状況を理解していた。けれど、お金を渡すか決めかねていて、まごついていた。そうしているうちに、女の子はプイっと後ろを向いて、僕の乗っているボート



写真2 クメール語とベトナム語が書いている建物

からさっさと離れていった。

さっきの2人組の女の子たちもそうだったが、女の子たちはわりにきれいな洋服を着ている。彼女たちはどこで服を買って、どのように洗濯しているのだろうか。服は、お金を使って買っているのだろうか。お金はどのように得るのだろうか。もしも僕からお金を得たとして、どのような用途に使うのだろうか。

そろそろ船も折り返し地点にやってきた。水上集落の端にきたようで、家もまばらになってきた。4人ほどの欧米系の人たちを乗せた船がゆっくり進んでいる。僕が行きに通った通りを進んでいるのだろう。彼女たちは盛んに写真を撮っていた。彼ら、彼女たちはここで何を感じているのだろう。

水に向かって何やらもみ殻のようなものを撒いている人がいる。もみ殻のようなものは、円筒形の木製の箱に入っている。どうやらもみ殻のようなものは、魚の餌であるらしい。船主がもみ殻撒きの男性と知り合いらしい。2人で少し話をした後、男性は僕たちにてのひら一杯分の餌をくれた。餌は干しエビだった。天日干しされていて、おいしそうなおいがする(写真3)。

もらった餌をどこに撒けばいいかわからず、見たり匂いを嗅いだりしていた。船主がこちらを振り向き、水面を指さしている。おそらく何かいる場所らしい。どうやらここに餌を撒け、ということなのだろう。罟が設置されているのだろうか。紐で束ねてある枝が水面から少し見えた。枝は魚にとって隠れ蓑となるので、魚を集める役割がある。ここでは魚を小さいうちに生け捕りし、大きく育てる



写真3 餌を撒く男性

こともあるらしい。育った魚は自分たちで食べたり、売ったりするのだろうか。水上集落に住む人はどんなものを食べているのだろうか。さかな、トリはいた。野菜や主食は何を食べているのだろうか。

中華の雰囲気漂う建物がある。赤色が多い、漢字の書かれている団扇のようなものが入り口に張られていた。右側の柱には、「?(陰で読めない)年大吉好運来」。左の柱には「平安富貴福星照」と書かれていた。中国系の人が住んでいるのだろうか。玄関からちらっと見える建物の中には、立派な額縁があった。そして祭壇のようなものもあった。さきほどはベトナム語の書いてある寺院を見た。小さい水上村に、少なくともクメール、ベトナム、中国の文化がある。この水上にはどのような人々が住んでいるのだろうか。

さまざまなルーツ、背景をもった人々が、同じ場所で暮らしている。

ボートやドラム缶、の上にはられた床の上に、さまざまな建物や施設が浮かんでいる。家にもいろいろな類がある。小さなプラスチック製のボートの上に屋根を設置した家。少し大きめの鉄製のボートに屋根を設置した家。竹や木などで組んだ筏の上に、壁や屋根を設置した家。大きさもさまざまである。ボート1隻サイズのものもあれば、20畳ほどのサイズの家もある。壁や屋根の材質もそ

れぞれだ。トタンだったり、木だったり、鉄だったり。屋根にソーラーパネルを設置している家、テレビのアンテナを立てている家、崩れた屋根がそのままの家。もしかすると、家の規模や材質は所得に関係があるのかもしれない。水上といえど、人々の生活には差がある。民族や宗教だけでなく、経済的にもさまざまな人が、同じ場所で暮らしている。

ボートは出発点に帰ってきた。

ここは水の上の世界。人と環境が混然とした世界、カンボジア・トンレサープ湖である。